インド洋大津波とコミュニケーション文化

藤　吉　洋一郎

目　次

はじめに
1. インド洋大津波の衝撃
2. 現地を見る
3. 忘れられた過去の災害
4. 忘れぬためのコミュニケーション文化

はじめに

2004年12月26日，インド洋で発生した大津波の被害をあのように大きくしたのは，いったい何だったのだろうか？

もちろん，何よりまず津波を引き起こした地震が，この100年の間に地球上で発生した地震のうち，4番目に大きな規模・マグニチュードであったということがあげられる。さらにもうひとつ，インド洋沿岸諸国の人々が，津波に対してまるで無防備であったことがあげられる。警戒心が無かったのは，過去に大津波が起きたことが無かったからではなく，かれこれ100年以上も大きな津波の体験をしていなかったため，津波の体験がほとんどの沿岸地域の人々に受け継がれていなかったからであった。

また，朝の早い時間帯にもかかわらず，海岸にはたくさんの人がいたことも，被害を大きくした原因としてあげられる。インド洋沿岸にはタイのプーケット島（写真1）など国際的なリゾート地があちこちにあり，折しもヨーロッパなどからクリスマス休暇の観光客が多く訪れていたのである。

大きな被害を受けたインドネシアやタイは太平洋にも面しているため，太平洋の津波警報組織には入っていたのだが，インド洋には津波の予報システムそのものがなかった。なぜかというと，100年以上も大津波を体験していなかったため，津波予報システムを整備していなかったのである。

インドネシアのスマトラ島沖で大地震が発生したことがわかった後でも，沿岸諸国では津波を警戒して避難をする時間的な余裕は十分あったにもかかわらず，「インド洋で津波が起きる」というアラームは，どこからも出なかったのである。

今回の津波のことを後々の世代に伝承していくには，どうすればいいのだろうか？　とりわけ，津波常襲地・日本列島の経験と文化をインド洋沿

写真1　プーケット島（タイ）

岸諸国に移転するには，どうすればいいだろうか？　津波体験の伝承するためのコミュニケーション文化に，日本はどのような貢献ができるかについて考察する。

1. インド洋大津波の衝撃

今回のインド洋沿岸諸国の津波被災者にとって，大津波の衝撃はどのようなものであっただろうか？　一度に一万人以上が亡くなる災害を“巨大災害”と呼ぶが，世界で起きた災害の犠牲者の9割はこの巨大災害によるものが占めている。巨大災害の被害をどうやって減らすかというのがわたしたちが取り組むべき大きな課題である。

スマトラ島沖地震はその巨大災害の中でも特別大きな災害であった。20万人から30万人が一度の災害で亡くなったというのは，史上でも数えるほどしかない最大級の災害である。マグニチュードは9.0で，この100年間に世界で起きた地震で4番目に大きな地震だということは，早い段階でわかったが，被害者が20万人から30万人にも上ろうとは予想できないことであった。

早い段階でどのようなことが考えられたのかを示すために，まず，大津波災害発生翌日のNHK総合テレビの解説番組『明日を読む』で，「インド洋の巨大津波」と題してこの問題を取り上げた。資料1（p. 62参照）に筆者のレポートを紹介する。

災害発生の翌日という段階であったにもかかわらず，この津波災害の問題点はほとんど網羅されている。情報化時代の賜物として，世界中からさまざまな情報がいち早く入ってきたことを示しているともに，実は，100年に数回程度の巨大災害だからといって，特段新しい問題を提起しているわけではないのである。災害発生の翌日という，はじめの段階で明らかになった問題点を以下に箇条書きにしてみると

① インド洋にも津波の警報組織を作る。
② 防潮堤など海岸で津波を食い止めるものを整備する。
③ 津波の恐ろしさを後世に正しく伝える。

となる。

その後のおよそ1年の国際社会の動きを見ると，②は時間がかかることでもあり，まだまだ先の課題かも知れないが，①と③はおおむねこの通りに進んでいる。いずれの分野でも日本が得意とするところであり，国際的にも貢献できるものと考えられる。とりわけコミュニケーション文化の分野の課題は③の『津波の恐ろしさを正しく伝える』ことである。この問題は日本でもなかなか解決できない課題であり，今後どのような対応が求められているのであろうか？　以下，考えていきたい。

2. 現地を見る

世界中の人々にとって，津波の恐ろしさが目に見えるような形で捉えられた大津波はこれが初めてであった。巨大津波が初めて私たちの前に姿を見せたのであった。この百年余りの間に日本を襲った明治と昭和の三陸津波は，波が到達した高さの記録などをみればいずれもインド洋のオオツナみに匹敵するような大津波であったと考えられるが，いずれも夜間や未明の暗い時間帯の発生であったため，目撃証言が少ないし，目撃した人は恐らく生き残っていないのだと考えられる。北海道の奥尻島を襲った北海道南西沖地震津波も大津波であったと考えられるが，これも夜間の発生であり，残念ながらちゃんとした目撃証言はない。日本海中部地震はちょうど正午ごろの発生であり，多く

の人に目撃され，貴重なビデオや写真の記録がたくさん得られたのだが，インド洋大津波と比べるとかなりスケールが小さかった。

このように，インド洋大津波は沿岸各国ともに昼間の時間帯の発生であり，たくさんの人が目撃したという事実そのものに大変大きな意義がある。本物を見たことで，津波に対する理解が大変深まったと考えられるからである。また，国際的な観光地を昼間襲ったことから，かつてないほどたくさんのビデオや写真といった映像資料が記録されたことによって，さらに多くの人が追体験することが可能となり，今後の津波防災に大変役に立つものと考えられる。

私はとにかく津波被害にあった現地を見てみようと，㈶沿岸技術研究センターのタイ現地調査団（江頭和彦理事長を団長とし，深海正彦企画部長，合川聖二郎主任研究員を団員とする調査団）に，京都大学防災研究所の高山知司教授とともに同行し，2005 年 4 月 14 日〜4 月 16 日の 3 日間，インド洋津波で大きな被害を受けたタイのプーケット，カオラック，及びピピ島の海岸・海浜及び背後市街地等を訪れ，現地調査をする機会を得た。

4 月 14 日は，プーケット島西岸の主要ビーチであるカマラビーチ，パトンビーチ，カロンビーチ，カタビーチ，15 日は，カオラックで被害の大きかったバンナムケン漁港，バンサックビーチ，レムパカラン，ククカッカビーチ，バンニャンビーチ，カオラックビーチ，さらに 16 日は，ピピ島のトンサイベイ，ラナベイ等を訪れた。

いずれも海岸・海浜の浸食状況，商業施設，住居等の被災状況，復旧状況を調査した。資料 2（p. 64 参照）はそのときの調査について，2005 年 4 月 29 日，NHK のラジオ第一放送「時の話題」で，「タイの大津波被災地を見て」と題してリポートした記録である。写真は参考までに沿岸技術研究センターの報告書から借用し，該当する部分に挿入したものである。

災害から 4 ヶ月後のタイの津波被災地を歩いてみて，最初に印象に残ったのは，海岸に植えてあったたくさんの巨大な樹木が，大津波の襲撃にも耐えて生き残っていたことである。樹高 15 m から 20 m もの巨木が，10 m を越えるような巨大津波を何度も受けた後も，葉を落とすこともなくちゃんと立っていたのには，驚きを通り越して感銘をすら受けた。枝に残された漂流物の残骸や，少し黄色く変色した木の葉によって，津波がどこまで達したかを知ることもできる。そればかりか海岸線の巨木の列は津波の勢いを和らげたり，高さを押さえる上で，ある程度効果があったと考えられるというのが同行した沿岸技術者たちの見解でもあった。それにしても，海岸の樹林帯はどうしてできたのだろうか？　被災地で話を聞くことができた現地の人たちは，いずれもこのような津波は経験したことはないのはもちろん，親やおじいさんおばあさんからも聞いたことがないという人たちばかりであった。樹林帯についても，比較的新しいヤシの林は明らかにリゾート開発の一環として植えられたものであったが，巨大なモクマオの木や名前が分からない巨木は，誰かが植えたというよりは前からそこにあったというものが多いようだった。だとすると海岸の樹林帯は人が植えたのではなく，天然のものなのだろうか？　それとも，先祖が津波などの波除のために植えたものが，長い年月の間に忘れられてしまったのだろうか？

写真 2　ピピ島（タイ）

上の報告でも述べたように，国際的なリゾートであるタイのインド洋沿岸のうち，プーケット島の復旧作業は急ピッチで進められていた。災害の

再発防止というよりは，とにかく復旧が第一というわけである。しかし，災害前には日本人の観光客が多かったパトン・ビーチなどには，ヨーロッパやオーストラリアなどからの観光客で再び賑わいがもどってきていたが，日本からの観光客はまだ，あまり見受けられなかった。災害の被災地を敬遠する日本人とそういうことにあまりこだわらないヨーロッパなどの人たちとの違いから来るのだろうか？　津波に対する考え方というよりは，「人の生き死に」に対する考え方の違いが大きいのかもしれない。

タイで被害がもっとも大きかった新興のリゾートであるマレー半島西岸のカオラックの方は，私たちが訪れたときには，まだ，住民の生活基盤の再建が精一杯で，観光地の復旧にはほとんど手が付けられていない状態で，今回の大津波災害の被害の深刻さを物語っていた。

復旧のさらにその先のことかもしれないが，被災地では今後またあるかもしれない大津波にどう備えればいいのだろうか？　タイのインド洋沿岸を大津波が襲ったのは，地震発生から2時間もたってからであった。カオラックやプーケット島では地震の揺れそのものはあまり感じなかったという人が多かったが，地震計では当然のことながらきちんと観測されていた。2時間という時間の余裕を計算に入れれば，太平洋沿岸と同じように，気象庁が津波警報を出して，メディアを通じて住民に伝達し，それを元に高台などに避難をすることが十分にできるはずであった。

従がって，インド洋沿岸諸国では，何をおいてもまず，津波予報のシステム作りを急がならないことはいうまでもない。しかし，それだけでは十分な効果は期待できないことも忘れてはならない。ラジオの放送でも述べたように，めったにはないけれども，起きたら大変なことになる災害に備えるということは大変困難なことだからである。人は忘れやすい生き物だから，悲惨な災害体験であっても，いつまでも忘れないでいることがなかんかできないからである。

とはいえ，今度のインド洋大津波の被災地でも，100年余り前からの言い伝えが，子孫を守ったという話がいくつか報告されているのは救いである。コミュニケーション文化が貢献できることは，今回の経験を子孫に語り継いでいくことではないだろうか？　100年も200年も先の子孫に，どうしたら今度の経験を語り継ぐことができるのだろうか？

3. 忘れられた過去の災害

日本の津波対策が進んでいるのはたびたび大きな津波災害に襲われたからである。日本で一番多くの津波の犠牲者が出たのは1896年の明治の三陸津波（図1）である。2万2千人あまりが犠牲になった。三陸地方はこれ以前にもたびたび大きな津波に襲われ，津波への関心が昔から日本で一番高い地方であった。

ところが1896年の津波のときは沿岸地方での揺れが小さかったこともあって，三陸沿岸の人々も今度のインド洋沿岸諸国と同じように，津波にほとんど警戒しないでいたところを襲われ，大きな被害を受けた。

比較的最近でも，日本では同じようなことがあった。1983年に起きた日本海中部地震（図2）のときがそうだった。日本海の秋田沖を震源とする大地震で，東北地方の日本海側の沿岸に大津波が押し寄せ，100人あまりが犠牲になった。

この災害で明らかになったのは，東北地方でも津波への警戒心が高かったのは，この100年余りの間にもたびたび大きな津波の被害を経験した太平洋側の人々だけで，100年余り大きな津波がなかった日本海側の人々には，「日本海側には津波の心配はない」といった間違った考え方が広まり，このときも津波にはまったく無警戒だったのである。

図1　昭和の三陸地震津波

図2　日本海中部地震津波

いま，インド洋沿岸諸国では太平洋と同じような津波予報のシステムを作ろうという話になっている。津波予報のシステムを作ることは大切なことであり，大きな効果が期待できる。

しかし，タイやインドネシアには津波予報のシステムが，太平洋沿岸にはあったのに，どうしてインド洋沿岸にはなかったのだろうか？　このことは，これまであまり議論されていないが，これは大変重要なポイントだと思う。なぜかというと，それはインド洋ではめったに大津波は起きないと考えられていたからである。しかし，めったに起きないということは，全く起きないのとは大違いで，いったん起きると人々の警戒心が無いだけに余計に被害が大きくなるのである。インド洋の巨大津波は，「めったには起きないが，起きれば大惨事になる」という災害の代表的なケースだったのである。そしてこれは，対策を立てる上でももっとも困難なテーマなのだ。

インド洋の大津波がかりに一定の間隔で繰り返しやってくるとする。しかし，それはこれまでの100年余りがそうであったように，おそらく人間の一生を超えるような長い間隔になるだろう。人々

図3　3つの津波の到達時間の比較

にとって，自分の一生の中では起きないかもしれない災害に，どこまで備えることができるかというのは，大変難しいテーマである。

この大変難しいテーマを克服するにはどのようなことが必要だろうか？　津波に対しての正しい知識を日頃から提供しておくことがそのひとつである。メディアが人々に提供する津波に関しての情報には，いつ，どこに，どの程度の津波が来るかという情報のほかに，まだまだ，提供して欲しい情報がある。

例えば，一つの波が押し寄せてきて，そのあと引いてゆくまでには，どれくらいの時間がかかるのか（図3），言い換えると何分続いたら波は止って，今度は逆向きに引いていくのかという説明が加われば，さらに理解が深まると思う。

また，走って逃げるにしても，どの方向へ逃げたらいいのかわからないと困る。さらに「津波はどれくらいの速さで襲ってくるから，どれくらいの速さで逃げないと間に合わない。」といった情報も必要だ。

さらに場合によっては家にいた方が良いといった場合もある。そうした個別具体的な行動を指示する情報が求められている。

また，どこへ逃げるかに加えて，個別の建物がどのくらいの流速まで持ちこたえられるのかといったことも検証をしておく必要がある。

例えば，木造の建物では水深が2ｍくらいになると壁が壊れるが，鉄筋コンクリートならば，さらに持ちこたえるといった計算がある。1993年の北海道南西沖地震（図3参照）の津波で大きな被害を受けた奥尻島の場合は，ちょっと意外なことに新しい家が壊れて古い家が残っていた。

なぜそうなったのかというと，古い家は柱で支える構造で，新しい家は壁のパネルで支える構造だったからである。壁は水圧で倒れてしまうが，柱の構造では壁が抜けても家は壊れなかった。

このため，二階へ逃げた人は助かっていた。そのような技術的情報やどこへ逃げたら良いかといったことが住民の視点に立った本当の情報になりうるわけである。技術者はそのような情報を出して欲しいし，またその責任があると思う。

それから気をつけなくてはいけないことは，得てして人は自分の体験したことだけで教訓を作ってしまう傾向があることだ。例えば，1993 年の津波で大きな被害を受けた北海道奥尻島では，実はその 10 年前の 1983 年の日本海中部地震でも津波の体験をしていた。そのことが，たくさんの人が高台にいち早く避難をするきっかけになったとマスコミもこぞって取り上げたが，逃げ遅れた人たちも 10 年前の津波を体験していたはずだ。

それから考えると，単に 10 年前に体験していたというだけでは，それは命を守る教訓には必ずしもなっていなかったのである。では，なんでその人たちは逃げ遅れたのだろうか。生き残った方の証言などによると，逃げ遅れた人たちは逃げる準備をしていたと言うのである。共通して言えるのは，10 年前の体験が裏目に出たのではないかということである。

日本海中部地震は，秋田沖で発生し，奥尻島に津波が押し寄せてくるまで 20 分近く経っていた。そのことをしっかり覚えていた人は，地震を感じてから津波が来るまでには，逃げる準備をする程度の時間的な余裕はあると思ったのではないだろうか。

しかし，実際には 3〜5 分で津波が来たために逃げ遅れてしまったわけである。

津波の体験をしたときに，「今回は津波が来るまでの時間はたまたま 20 分だったけれども，次は何分かわかりませんよ」ということをきちんと教えておかなければいけなかったのではないだろうか。

平常時にそうした情報を提供するのがハザードマップであるが，本当に有効なハザードマップにするには，そうした個別具体的な情報を盛り込んだものでなければいけないと思う。

これについての詳細は，平成 15 年度大妻女子大学文系紀要の筆者の論文，「『災害体験に学ぶには』── 鳥取県西部地震，日野町震災シンポジウムからの提言」を参照されたい。

4. 忘れぬためのコミュニケーション文化

インド洋大津波からおよそ 3 ヶ月後の，2005 年 3 月 29 日にインドネシアのスマトラ沖で，またまた大地震が発生した。このときには，日本の気象庁も「広範囲で津波が予想される」という，「警報に準ずる情報」を発表し，沿岸各国にも通報した。

このように遠くはなれた場所からでも，必要な情報さえ入手できれば，津波の発生を予報することは可能なのである。そして，その際には予報を住民に知らせるメディアの役割が大変重要になる。

しかし，やっかいなことには，その予報を聞けば住民は直ちに避難行動に移るとは限らないのである。

2004 年の暮れのような巨大な津波は頻繁に発生するわけではない。将来，インド洋に津波予報システムができたら，大地震が起きると津波警報が発表されるようになる。

しかし，2005 年 3 月のケースが現にそうであったように，津波警報が出てもいつも大きな津波が来るとは限らない。このため，津波警報に従って避難をしたが，何事もなしに終わるというケースが今後何十年もの間に何度も繰り返されることになるだろう。そしてその挙げ句に，津波警報が出ても人が余り避難をしなくなった頃に，巨大津波がまた起きるという皮肉な繰り返しになるのではないだろうか。

津波予報が必要ではないというのではない。津波予報は必要だが，それだけでは十分ではないと

いいたいのである。

それではどうすれば良いのだろうか。実は救いがあって，インド洋の沿岸諸国の中でも，100 年以上も前の津波体験が残っていたのである。「大きく潮が引いたら，海が攻めて来るので山へ逃げよ」という言い伝えがあったので，山へ避難をしたという人たちがいた。インドネシアのシムル島や，タイのスリン島などにこうした言い伝えが残っていて，人々の命を守るのに大変役に立ったという（資料 3（p. 67 参照））。

実はこれが，今後の津波対策としてもっとも期待できる方法ではないかとわたしは思う。

そのためには今回起きたことを子供や孫の世代に言い伝えていく仕組みを各地で育てていかなければいけない。

初めの部分でも述べたように，比較的に津波災害の経験が豊富な日本でも，津波の恐ろしさが必ずしも正しく伝わってはいないし，また，それを伝えるべきメディアの役割もまだまだ果たせていない。手を変え品を変えして，情報を伝えていかなければならない。

津波の恐ろしさを伝える上で役立つものとして，インド洋の巨大津波のあとで，急に関心を集めたものがある。「稲むらの火」の物語である。

日本では戦前の小学校の国語の教科書に，「稲むらの火」というラフカディオ・ハーンの原作をもとにした物語がのっていた。もともとは自らの私財をなげうって大勢の人の命を救った人物を紹介する修身の教科書的な物語であったのだが，津波の襲ってくる前の現象がリアルに表現されていることから，津波防災の教訓として再び注目されたのである。「稲むらの火」の物語に登場する和歌山県有田郡の湯浅町，広川町の消防本部のホームページに，「稲むらの火」と教科書の内容を紹介する記事が掲載されているので，引用したい（資料 4（p. 67 参照））。

小学国語読本に取り上げられている物語は，安政元年（1854 年）に広村（現在の広川町）を襲ったいわゆる安政の南海地震のときの大津波のことである。このとき千葉県銚子の醤油の事業主であった浜口梧陵（教科書では五兵衛）は，たまたま郷里の広村に帰郷していたときに，突如大地震が発生し，紀伊半島一帯を大津波が襲った。

彼は，稲むら（取り入れたばかりの稲束を積み重ねたもの）に火を放ち，この火を目印に村人を誘導して，彼らを安全な場所に避難させたというのである。

しかし，この教科書に書かれた『今の地震は別に激しいというほどのものではなかった。しかし，ゆったりとした揺れ方と，うなるような地鳴り…』という地震の様子や，『風とは反対に波が沖へ沖へと動いて，海岸には広い砂浜や黒い岩底が現れてきた』という津波襲来の前の海岸の変化は，実は安政の南海地震のときのことではなく，1896 年の明治の三陸地震のときのことであった。ラフカディオ・ハーンがこの物語を書いたのは，明治の三陸津波の直後のことであったが，広村に伝わる『生き神様』浜口梧陵の話は，それより 40 年余り前の安政の南海地震のときのことであった。この物語が小学校の教科書に取り上げられた狙いは，津波の前兆現象や津波の様子を伝えるためというよりは，浜口梧陵の美談を紹介することにあったと考えられる。津波災害の教材としてこの物語を活用するのであれば，このあたりの事情が分かるような補足説明が必要だと考えられる。

この『稲むらの火』の物語は，インド洋の大津波のあと，内閣府によって紙芝居につくられ，外国語にも翻訳されている。災害体験を教訓として如何に生かすか，貴重なお手本になると考えられたからである。内閣府の広報誌「ぼうさい」の 2005 年 9 月号にこのことを紹介する記事が載っている（資料 5（p. 71 参照））。

またさらに，この紙芝居は次のホームページで見ることができる。

http://www.tokeikyou.or.jp/bousai/inamura-pshow-top.htm

ただ，災害体験を教訓にするときに，注意しなければいけないことがある。それは，科学的な知識に裏付けられたノウハウにしなければ，間違った申し伝えになってしまうおそれがあるということだ。

上に紹介したホームページにある内閣府の紙芝居はこの点を十分に配慮したものであり，紙芝居の後書きに次のようにのべてある。

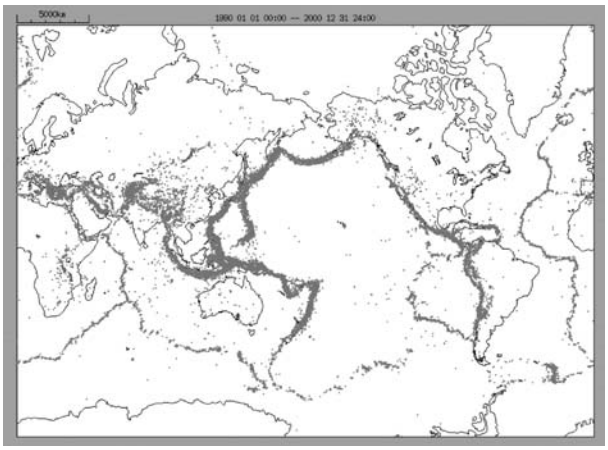
> 防災教育としての「稲むらの火」
>
> 1986 年，ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は，日本の神の概念は諸外国のそれとは著しく異なっていることを述べた作品「A Living God」を著しました。その中に，稲むらに火を放って村人を導き，その命を津波から救い，神として祭られた濱口五兵衛という人物の活躍についてのエピソードがあります。また，この作品を元に教員であった中井常蔵は文部省（当時）の小学国語読本の公募に応じ，それは「稲むらの火」として昭和 12 年から 22 年まで，読本に掲載されました。濱口梧陵をモデルにしたこの二つの作品によって，津波の危険が防災知識として人々の心に残りました。「地震のあとは津波を心配せよ」，突然「波が引いたら，津波を心配せよ」，と防災教育のエッセンスだけを連呼しても人の記憶のとどまる時間は短いでしょう。人々の日常の生活に結びついたぼうさいという位置づけがあってこそ，防災は前向きな価値を持ちます。…以下省略。

ここにも述べられているように，災害体験を防災知識として後々に伝えていくためには，単に個人の体験に基づいた経験則に頼るのではなく，専門家の科学的な知識に裏打ちされた経験則に修正したうえで，それを子や孫に申し伝えていくような，災害伝承の新たなコミュニケーション文化を育てていくための，社会全体というか，少なくとも地域ぐるみの息の長い取り組みが大切だと思う。

資料１　NHK テレビあすを読む「インド洋の巨大津波」（2004 年 12 月 27 日放送）

インドネシアのスマトラ島の沖で起きた強い地震による津波は，インド洋沿岸のインドやアフリカにまで被害が及んで，地震と津波による犠牲者は１万８千人を超えました。

インド洋の巨大津波の被害を大きくしたのは何だったのでしょうか？



世界の地震分布

1990 年から 2000 年まで，マグニチュード 4.0 以上，
深さ 50 km より浅い地震

地震は地球上のどこでも同じように起きるのではなくて，限られたところで起きています。インドネシア付近は日本と並んで世界でも最も地震の多い地域です。

それはなぜかといいますと，地球の中でも特殊な場所に位置しているからです。

地球の震源分布図赤い点が地震の震源です。日本付近は真っ赤です。インドネシアも同じです。

最新の地球科学によりますと，地球の表面は 10 枚くらいのプレートと呼ばれる岩盤に別れています。

地震の跡に囲まれた部分がだいたいそのプレートに相当します。つまり，地震はプレートが互いに押し合ったりもぐりこんだりしている境界付近の真っ赤になっている部分で起きるのです。インドネシアも日本もその境界付近に位置しているのです。

今回の地震はインド洋の海底のプレートがインドネシア付近の陸側のプレートの下にもぐりこんでいるところで起きました。過去にも何度も繰り返し起きていると考えられる海溝型の巨大地震です。

津波はインド洋を越えてインドやアフリカにまで広く被害を及ぼしました。地震を起こしたエネルギーの大きさをマグニチュードという言葉で表しますが，Ｍ９というのはあまり聞いたことがないという方が多いのではないでしょうか。

それもそのはず，Ｍ９クラスの地震は 1900 年以降で観測されたのはこれが５回目で，“超巨大地震”とも呼ぶべきものなのです。

いま日本で心配されているいわゆる東海地震が１度に 30 個起きたのに相当します。

これまでの最大の地震は 1960 年のチリ地震のＭ 9.5 でした。南米チリ沖の海底で，長さおよそ１千キロの断層が動いたことによるものでした。日本から見ると地球の裏側で起きた大地震だったのですが，太平洋を丸１日で横切ってきた大津波が日本の太平洋沿岸にも押し寄せました。日本でも 142 人の死者・行方不明者が出ました。

今度のスマトラ島沖の地震の規模が極めて大きかったこと，これが被害を大きくした第一の原因でした。

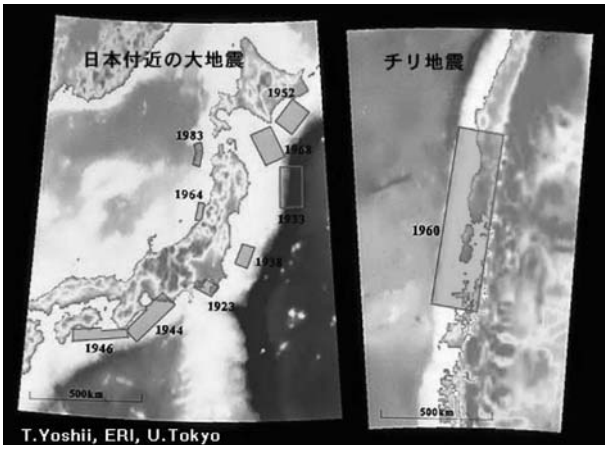
今回インドネシア沖の海底では，長さ数百キロの断層が２か所で動いたのではないかとみられています。

インド洋では 20 世紀以降に高さ２ｍから６ｍ程度の津波が３回起きているということです

が今度のように 10 m もの大津波はなかったようです。

地震が起きる海岸地方に住む人は自分自身は経験していなくても，言い伝えなどで地震の後には津波に警戒が必要なことは知っていると思います。しかし，遠くで起きた地震による津波になるとまったく無警戒です。

かつて，太平洋では 1946 年のアリューシャン列島東部の地震による津波で，ハワイ諸島で 173 人の死者がでたことをきっかけに，ハワイに津波予報の国際組織である「太平洋津波警報センター」が設けられました。



チリ地震

出所：東京大学地震研究所ホームページ

そしてさらにチリ地震津波後に一層整備され現在は日本を含む 26 の国や地域に対する津波に関する情報センターとしての役目を果たしています。

また，日本の気象庁も来年 3 月から北西太平洋津波情報センターを設立してロシアから北東アジア，それに東南アジア各国に津波情報のサービスを始めることになっています。

ところが，インド洋にはこうした津波の監視や警報のシステムがまだ整備されていませんでした。

このため，地震が起きてから数時間以上たって津波が襲来した地域でも大きな被害を受けてしまいました。これが被害を大きくする第 2 の原因になりました。

それではこうした被害を少なくするにはどうすればいいのでしょう？　津波警報を出して警戒を呼びかけることが必要です。これを機会に太平洋にならって，インド洋にも国際的な協力で津波の警報組織を作るべきだと思います。これが第 1 の課題です。

そのためには“津波”という言葉が国際語になるほど，津波研究の歴史と技術が豊富な日本がきっと役に立つことができると思います。

また，津波の勢いを防ぐ防潮堤などの整備も進んでいなかったことも被害を大きくすることにつながったようです。防潮堤などを整備すること，これが第 2 の課題です。この面でも日本が貢献できることが少なくないと思います。

さて，今度のインド洋の巨大津波を同じ地震津波の危険国，日本に住む私たちはどう受け止めたらいいのでしょうか？　日本では津波への備えが進んでいるので，もう心配はないかというと，実はそうではないのです。たとえば三陸地方では 1896 年の 2 万 2 千人が犠牲になった明治の三陸津波から 100 年以上，3 千人あまりが犠牲になった 1933 年の昭和の三陸津波からでも 70 年以上がたちます。

記憶が遠のくにつれて，警戒心が薄れてきてはいないでしょうか？　大きな地震が起きる度に，津波の危険地域のみなさんがどのような行動をとったかのアンケート調査を地元の放送局や自治体などが行ってきましたが，避難をしたという回答がいつも驚くほど少ないのです。

去年の 5 月 26 日に宮城県沖の地震があった際にも，現地で東北大学や群馬大学など 4 つの

アンケート調査が実施されました。地震発生とともに避難をした人は1割前後しかありませんでした。このときは幸い津波は発生しなかったのですが，もしも津波がすぐに襲っていたら9割の人が助からなかったことになります。

津波はひとつの山が通り過ぎるまでにおよそ10分とか1時間とかかかる，波というよりはむしろ潮が押し寄せてくる現象です。わずか30 cmの津波でも命を落とすことがあるのは，流れが急で，まるで川の激流の中に身を置くような状況になるからです。

今度のインド洋の津波では，たくさんのビデオの映像が撮影されていますが，テレビの映像で津波が大変危険なものであることがお分かりいただけたでしょうか？　日本のように地震や津波の情報が発達したところで，津波の危険を予想して避難をする人が意外に少ないのは，津波の恐ろしさが正しく伝わっていないからではないでしょうか。それを伝えるメデイアの役割もまだまだ果たせていないと思います。

避難をしても津波が来ないで終わると，何か損をしたような気がするという方がよくあるのも気がかりなことです。しかし，考えてみてください。避難をしていたら，津波がやってきて，家も町も何もかも破壊してしまったというよりは，何事もなく済む方がずっと幸せなことではないですか。

インド洋の巨大津波を他山の石として，津波への警戒と避難の問題を今一度確めたいものです。

資料2　NHKラジオ第1放送　時の話題「タイの大津波被災地を見て」（2005年4月29日放送）

〈アナ前説〉　インド洋の大津波が起きてから4ヶ月がたちましたが，時の話題，今日は「タイの大津波被災地を見て」ということで，藤吉洋一郎解説委員です。

アナ：藤吉さん，タイにはいつ行ってきたのですか？

藤吉：今月の中旬に，港湾整備関係の技術者の皆さんと一緒に，災害からおよそ4ヶ月たったいまのタイの被災地を見てきました。

マレー半島西岸の真ん中付近にあるタイのパンガー県のカオラックとその南に隣接したプーケット島，それにその沖合いのピピ島です。いずれも国際的なリゾートとしてよく知られているところで，中でもプーケット島は，日本人の観光客がたくさん訪れるところです。

アナ：インド洋大津波のタイの被害はどんなものだったのですか？

藤吉：20万人から30万人という膨大な犠牲者のうち，タイの犠牲者数は5,400人近くでしたが，ヨーロッパや日本など海外からのリゾート客がその多くを占めていたことと，たくさんのビデオが撮影されていたことなどから，被災地の情報がもっとも多く伝えられてきたのではないでしょうか。

中でもマレー半島のカオラックはインド洋に面した南北25 kmに及ぶ海岸が新しいリゾート地帯として開発された地域でしたが，タイの沿岸地域ではもっとも高い10 m前後の大津波が襲い，犠牲者の8割に当たるおよそ4,200人あまりの犠牲者が出ました。

そのカオラックでも一番北よりのナンケン村の漁港が最も印象的でした。タイ南部地域最大の漁港です。住民の犠牲者が2,000人あまりともっとも多かったところでもあります。漁港は建物も桟橋もほとんど破壊されていました。海岸から500 mも内陸に入ったところに，津波

に押し上げられた中型の漁船が2隻，そのままになっていました。

そうした中で，仮復旧した桟橋の一部を使って，魚市場が開かれていました。私たちが訪れたのは午前10時前でしたが，大きな竹で編んだかごなどに入れたマナガツオやカマスなど漁船が取ってきたばかりの魚を，トラックに積み込むのが見られました。

その傍らでは，畳ぐらいの大きさのコンクリートの板を二人がかりで持ち上げてはコンクリートの杭の上に渡して，桟橋を直している姿や，木造の小船を修理したりしている姿も見られました。ナンケン村ではようやく復興の動きが感じられるようになったというところでした。

アナ：リゾートの海岸はどうでしたか？

藤吉：カオラックには岬と岬に挟まれたビーチがいくつもあって，最近建設されたホテルが立ち並んでいたということですが，海沿いにあったホテルや地元の人たちの家はみな消失してしまい，廃墟のようになっていました。

中でも，バンヤンビーチという浜辺では，まだ新しいコテージ風のホテルが，8mの津波で無残に破壊されたままになっていました。隣には，遊泳中に亡くなったタイの王様のお孫さんが泊まっていたというホテルがありましたが，そこも大きな被害を受けていました。

被災地では土地の所有権をめぐる争いがあちこちで起きているそうで，ホテルの跡地には山の土，赤土が海岸に張り出すように盛り上げられているのが目立ちました。元の敷地境界を示すためだということでした。

このように，カオラックのリゾートの復興はまだまだというところでしたが，いち早く生まれた観光スポットもありました。

王様の孫の護衛に当たっていたという警備艇が，海岸から1kmも入ったところに打ち上げられているのですが，津波記念のモニュメントとしてそのまま残そうということになっているそうです。すでにちょっとした観光名所になっていて，見物客に果物を売る店まで出ていました。

アナ：そうしますと，タイの津波被災地の復興はまだまだ先ということでしょうか？

藤吉：カオラックの海岸地域はそうでした。でもそこから100kmほど南のプーケット島の方は，最大の産業である観光を早く再開しようという地元の人たちの取り組みを反映して，ずいぶん復興が進んでいました。特に，日本人の観光客に人気があったパトンビーチは被害が少なかったこともあって，浜辺には賑わいがもどっていました。たくさんの人，車，バイクに驚きました。

先月，日本の国土交通省と旅行業界が派遣した観光地の調査団の報告でも，プーケットのリゾートは「欧米からの観光客数は，比較的早く回復しているが，日本人観光客はほとんど戻っ

ていない。」と報告していますが，それから1ヶ月以上たっているのに，やはり日本からの観光客の姿はほとんど見受けませんでした。

アナ：これまでの調査ではどんなことがわかったのでしょうか？

藤吉：津波の勢いを抑えるのに効果があったものがいろいろ見つかっています。なんといっても一番の決め手は標高が高いところに建物を建てることですが，それ以外にも，海岸線に沿って植えられた樹木や林が津波の高さや勢いを抑えるのに効果があったことがわかりました。タイには緑が多いのですが，海岸沿いには高さが20 m ほどもあるモクマオの巨木や高さ10 m あまりのヤシの木も多いのです。大きな木は元通りだったのが印象的でした。

カオラックのバンサクビーチというビーチでは10 m もの津波に砂が運び去られて砂浜の表面が1.5 m も低くなってしまいましたが，波打ち際の砂地に植えてあったヤシの木は，根元の部分を洗われながらも残っているものがありました。

このほか，プーケット島のカロンビーチという海岸には，タコの木といってたくさんの根が生えている木が植えてありましたが，これも砂浜を守るのには効果があったようでした。きょうは緑の日だから強調しておきたいのですが，津波防災にも緑の効用があるのですね。

もともと，インド洋沿岸はこれまであまり波による被害を経験していなかったこともあって，海岸の護岸堤防や波消しの堤防などはありませんでしたが，こうした自然の植生を利用した津波対策も有効なようです。海岸の地形や沿岸地域の利用状況に応じた防護対策を考える必要があるようですね。

アナ：大津波は被災地に傷跡だけを残したのでしょうか？

藤吉：そうでもありません。プーケット島のパトンビーチより少し南に**カロンビーチ**という海岸があります。こちらは津波の影響は少なかったということでしたが，津波で海岸の砂が洗われて，「鳴き砂」がよみがえったといいます。「鳴き砂」は日本海側のきれいな砂浜などにあると話には聞いていましたが，歩くのは初めてでした。確かに，踏みしめると，「きゅっ，きゅっ」と鳴る音が聞こえました。ここだけではなく，津波の被害を受けた海岸ではどこも，ビーチの砂ばかりではなく，海の水もきれいになったと地元の人たちはいっていました。

アナ：今後の津波対策としてはどんなことが必要でしょうか？

藤吉：津波予報のシステム作りを急がなければなりません。でも，それだけでは心配です。めったにはないけれども，起きたら大変なことになる災害に備えるということは大変困難なことです。でも，今回のインド洋大津波でも，100年余り前からの言い伝えが，子孫を守ったという話がいくつか報告されています。やはり，一番効果的なのは今回の経験を子孫に語り継いでいくことではないでしょうか？　100年も200年も先の子孫に，どうしたら今度の経験を語り継ぐことができるか，ぜひ，世界中みんなの知恵を集めて行きたいですね。

資料 3　朝日新聞朝刊（2005 年 1 月 19 日）

7万8000人の島、死者7人

震源地近く インドネシア シムル

大津波の記憶

被害最小限に

首相「防災の知見」アピール

江戸時代の実話紹介

資料 4　和歌山県有田郡の湯浅町，広川町を管轄する消防本部のホームページ

（http://www5.ocn.ne.jp/~yuhirofd/index.htm）

稲むらの火

「これはただ事ではない。」とつぶやきながら，五兵衛は家から出てきた。

――『稲村の火』より抜粋――

安政元年（1854）に広村（現在の広川町）を襲った大津波。浜口梧陵は被災した人々のために敢然と立ち上がりました。彼の活躍ぶりを描いた「稲むらの火」からは，当時の緊迫感がひしひしと伝わってきます。

梧陵は，広村で分家浜口七右衛門の長男として生まれ，12 歳の時に本家の養子として銚子（現在の千葉県）に移り，家業であるヤマサ醤油の事業を継ぎました。

たまたま彼が広村に帰郷していたとき，突如大地震が発生し，紀伊半島一帯を大津波が襲いました。

彼は，稲むら（ススキや稲束を積み重ねたもの）に火を放ち，この火を目印に村人を誘導して，彼らを安全な場所に避難させました。しかし，津波により村には大きな爪あとが残りました。

浜口梧陵の肖像

このかわり果てた光景を目にした梧陵は，故郷の復興のために

現在の堤防（梧陵堤）

身を粉にして働き，被災者用の小屋の建設，農機具・漁業道具の配給をはじめ，各方面において復旧作業にあたりました。また，津波から村を守るべく長さ 650 m 余り，高さ約 5 m の防波堤の築造にも取り組み，後の津波による被害を最小限に抑えました。

その他にも，私塾「耐久舎」の開設，又藩政，国政にも様々な活躍をし，その功績をたたえる碑が広川町内の各地に建立されています。

梧陵の精神は湯浅広川消防組合の防災の精神的支柱として受け継がれています。

耐久中学校グランド内の銅像

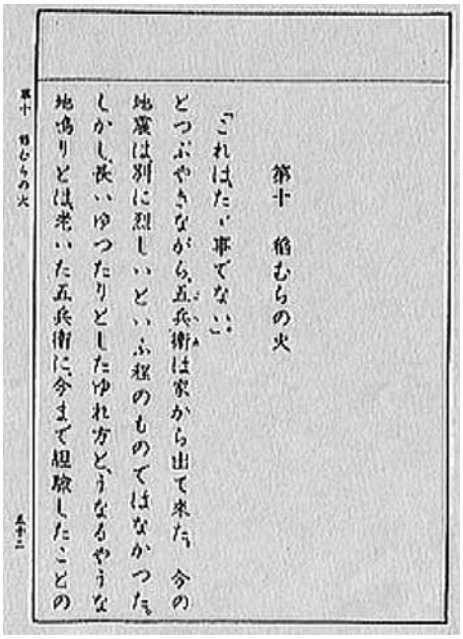
広川庁舎前の「稲むらの火」広場の銅像

浜口梧陵の偉大な業績を称え，明治 30 年（1897）小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）により「生ける神」なる物語として全世界に紹介されました。

又，昭和 12 年文部省発行，小学校国語読本巻十（5 年生用）に「稲むらの火」として浜口梧陵を紹介しました。

これは「稲むらの火」の原文ですが，上記史実とは異なっております。

なお，その他詳細に関しては広川町教育委員会までお願いします。



第十　稲むらの火

「これは、たゞ事でない。」

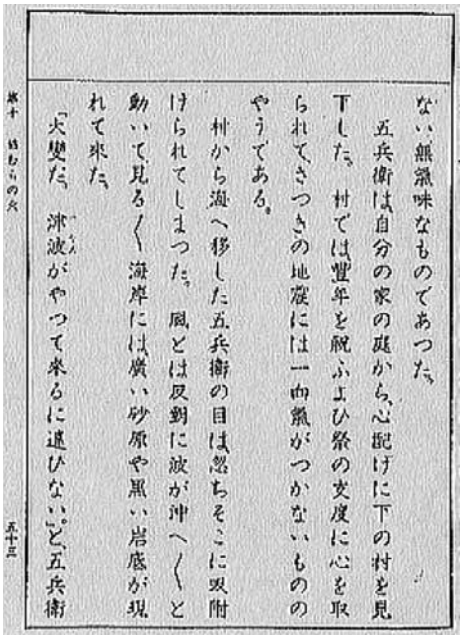
とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで想像したことの

小學國語讀本

尋常科用

文部省

巻十

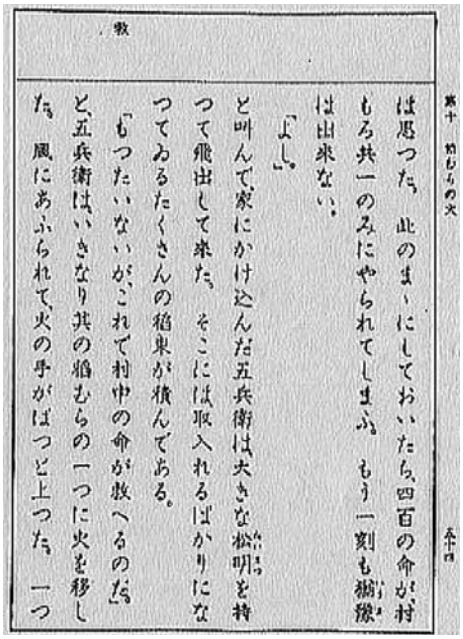


ない無氣味なものであつた。

五兵衛は自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では豐年を祝ふえびす祭の支度に心を取られてさつきの地震には一向氣がつかないもののやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は忽ちそこに吸附けられてしまつた。風とは反對に波が沖へ〳〵と動いて見る〳〵海岸には廣い砂原や黑い岩底が現れて來た。

「大變だ。津波がやつて來るに違ひない。」と五兵衛



は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が村もろ共一のみにやられてしまふ。もう一刻も猶豫は出來ない。

「よし。」

と叫んで家にかけ込んだ五兵衛は大きな松明を持つて飛出して來た。そこには取入れるばかりになつてゐるたくさんの稻束が積んである。

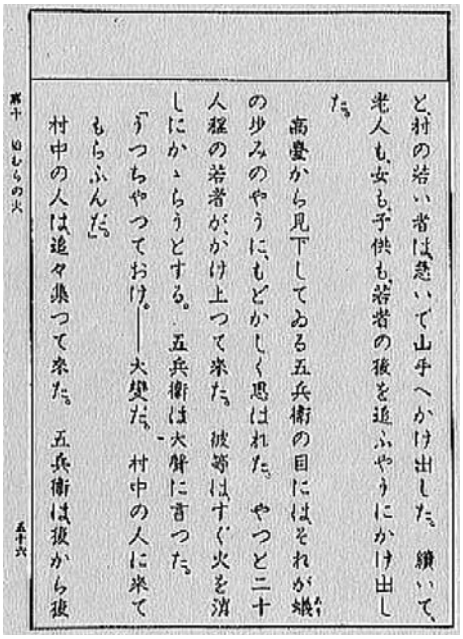
「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛はいきなり其の稻むらの一つに火を移した。風にあふられて火の手がぱつと上つた。一つ

又一つ五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稻むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つたまゝ沖の方を眺めてゐた。

日はすでに沒して、あたりがだん〳〵薄暗くなつて來た。稻むらの火は天をこがした。山寺では此の火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。社屋さんの家だ。」



と村の若い者は急いで山手へかけ出した。續いて、老人も女も子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目にはそれが蟻の少みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人程の若者がかけ上つて來た。彼等はすぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。――大變だ。村中の人に來てもらふんだ。」

村中の人は追々集つて來た。五兵衛は彼から彼

から上つて來る老幼男女を一人々々數へた。集つて來た人々はもえてゐる稻むらと五兵衛の顏とを代るゞ見くらべた。

其の時、五兵衛は力一ぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて來たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見るゝ太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて來た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきとを以て、陸にぶつかつた。人々は我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して來た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は自分等

の村の上を荒狂つて過る白い怒しい海を見た。二度三度村の上を海は進み又退いた。

部落ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は波に攫ぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稻むらの火は風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまゝ五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

資料５　内閣府の広報誌「ぼうさい」（2005年９月号）

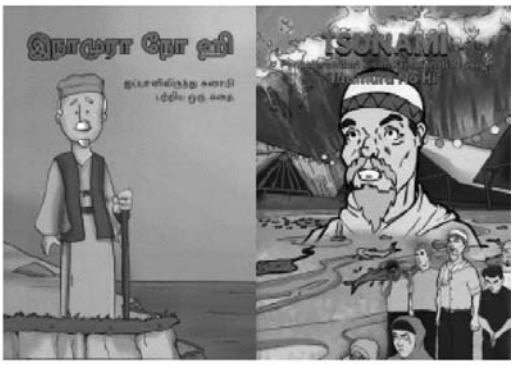
「稲むらの火」の紙芝居、DVDを作成

内閣府は、新たに「稲むらの火」の紙芝居、絵本、ＤＶＤなどを作成し、「稲むらの火」のホームページを設けました。これは、国内外で「稲むらの火」の物語を活用した津波・地震防災教育を学校や地域で推進していただくために作成したものです。

「稲むらの火」の物語は、史実に基づいた物語で、戦前から戦後にかけて小学国語読本に掲載され、広く知られていましたが、昨年末のインド洋津波の発生や相次ぐ国内の地震を受けて、いま、再び脚光を浴びています。

今後、内閣府は文部科学省やアジア防災センターと連携し、これらの素材を活用して、国内外の学校や地域で津波・地震の防災教育を広げていくこととしています。

主要なコンテンツは、内閣府防災担当ホームページからダウンロードできるほか、各県教育委員会からも借りることができます。



■国内向け資料

1．新作の紙芝居（内閣府監修）	・小学生を主な対象に内閣府監修。全16枚。 ・史実にある堤防建設までを話に含む。 ・下記2．のDVD、3．のCDにも所蔵。 ・英語版も用意（印刷版はなく、3.のCDに搭載）。
2．DVD	①1.の新作紙芝居。読み上げ付きの動画形式。 ②静岡県内各地の17の人形劇団が集まったボランティア20名により演じられている人形劇の動画。国連防災世界会議にもパブリックフォーラムのひとつとして参加。シナリオを公開し、他の方々が演じることも歓迎（詳しくは下記4.のサイト参照）。 ③静岡市の影絵劇団の方々により演じられている影絵劇の動画。シナリオを公開し、他の方々が演じることも歓迎（詳しくは下記4.のサイト参照）。 ④③の復刻版紙芝居（（社）再開発コーディネータ協会が、昭和17年製作の紙芝居を復刻）の動画。読み上げ付きの動画形式。 別途、英語版も用意。
3．CD（内閣府監修）	①コンピュータ用版では新作紙芝居の印刷用の画像データ。紙芝居を作れる。日本語版、英語版を搭載。 ②小学国語読本の「稲むらの火」の全文。 ③ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）"A Living God"の中の挿話全文（英語）。
4．「稲むらの火と津波対策」のページ	内閣府防災担当ホームページ内で、「稲むらの火」の物語の紹介のほか、1.～3.に取り上げた資料、「稲むらの火」に関する諸資料、津波対策の教材、関連サイトへのリンクなどを掲載。紙芝居、人形劇、影絵劇のシナリオもダウンロード可能。 →内閣府「みんなの防災」のページ（http://www.bousai.go.jp/minna）の「稲むらの火」主なページに対応した英語版のページも用意。

■海外向け資料

アジア地域８か国版「稲むらの火」のストーリーを利用した津波防災のための小冊子	
対象	バングラデシュ、インド、インドネシア、マレイシア、ネパール、フィリピン、シンガポール、スリランカのアジア地域８か国向け
種類と言語	各国大人用と子ども用の２種類をそれぞれ1,000部ずつ作成 （インドでは、それぞれヒンディ語、タミール語の２言語バージョンを作成。合計18バージョン）
監修	（財）都市防災研究所（アジア防災センター）
作成主体・内容	アジア地域でより効果的な防災活動を行うため、互いの知識や情報を交換すべく設立されたNGOアジア防災・災害救援ネットワーク（ADRRN）に参画するNGOが、日頃から地域に密着した活動を展開している経験を活かし、対象国の歴史・文化・社会的背景を踏まえて「稲むらの火」のストーリーの紹介方法を工夫し、各国で現地のイラストレータなどの協力を得て、翻訳・翻案。 「稲むらの火」のストーリーのほか、避難情報などの津波防災情報も含む。
配布	冊子は、各国のNGOが現地での活動などを通して配布

問い合わせ先：内閣府政策統括官（防災担当）付
電話 03-3593-9394　FAX 03-3581-8933

①

海辺の村です。
それは、江戸時代の末のこと、十一月のはじめ、ある日の夕方でした。
紀州和歌山の広村では、秋の取り入れが終わり、田んぼには、いくつものいなむらが、ならんでいました。
「米がたくさん取れたし、いいわらも残ったし、ありがたい、ありがたい。」
村人たちは、こういって、喜びました。
かり取ったあとの、いねのわらは、大切な使い道があって、たばにして、高く積み上げておきます。これが、「いなむら」です。
そして村人たちは、そろそろ、冬の準備にとりかかっていました。
（少しの間）
ごおーっ
ーぬきながらー

②

地鳴りがして、大地が、家が、はげしくゆれ動いたのです。
ー上下左右に画面をゆすりながらー
「おおっ、地震だ！　大地震だ！」
村人たちは、家の外にとび出しました。
「きゃーっ。」
「こわいよう。」
こどもたちは、親にしがみつきました。
（少しの間）
かべがくずれ、かたむいた家から、けむりのように、ほこりがまい上がりました。
ーさっとぬくー

③

広村をおさめる庄屋として、村人にしたわれている浜口儀兵衛も、家族といっしょに家の外に出ました。
「わが家は、だいじょうぶだが、村人たちは、無事だろうか……。」
空には、黒い雲と白い雲とが、あやしく入りまじって広がり、遠くの雲を切りさくように、するどい光が走りました。
しかも、その遠い海のむこうから、ドドン　ドドン　ドドン
太鼓がとどろくような音が、聞こえてきたのでした。
「これは、おそろしいことになる……。」
ー三分の一ぬくー
儀兵衛は家族に、
「いますぐ、丘の上、一本松から広八幡神社のほうへ、ひなんしなさい。」
ー残り三分の一ぬきながらー
と命じて、自分は家の中に入りました。

④

「何をなさるのですか。」
儀兵衛は、たいまつに火をつけながら、
「津波だ。
まもなく、津波がおしよせてくる。
村じゅうに、危険を知らせて歩く間はない。
田んぼのいなむらに、火をつけて、合図するのだ。」
ーさっとぬくー

⑤

儀兵衛は、走りました。
いなむらのひとつに、火をつけます。
よくかわいているいなむらは、ぼっと
燃え上がりました。
―半分ぬく―
次から次へ、次の田んぼへ。
儀兵衛は、走って走って……。
「みんな、早く集まってこいよ。
そして、丘へひなんするのだ。」
―全部ぬく―

⑥

「庄屋さまの所が、火事だぞ。」
「庄屋さまに、何かあったら大変だ。」
「それ、火をけしにいけ。」
村人たちが、すぐさま、集まってきました。
こんな時には、村じゅうひとり残らず、
火けしに、加わることになっていたのです。
―ぬきながら―
「庄屋さまあ。」

⑦

まっ先にやってきた若者たちが、火を
けそうとすると、儀兵衛がおしとどめました。
「津波だ！　いなむらの火をけすな。」
「庄屋さま！　どうしてですか。」
「津波だ。津波がくる。
村のみんなが、集まってきたかどうか、
たしかめるのだ。
そして、一本松から、
広八幡神社のほうへ、
みんなをひなんさせるのだ。」
「はい、庄屋さま。」
―ひしずつぬきながら―
こうして村人たちが、高い所に
ひなんした時、
「あれを見ろ！」
―きっとぬく―

⑧

儀兵衛が、海のむこうを指さしました。
「なんだろう！」
村人たちは、おそろしいものを見ました。
まさに、暗くなりかけた沖の海に、
長く黒い雲が広がり、
こちらに、ぐんぐんせまってきます。
どどどどどぅん
「津波だ！」
「津波がくる！」
―ぬきながら―
ぐうおーん

⑨

人々は、思わず身ぶるいしました。
海辺の村が、木けむりとともに、津波に
おそわれたのです。
村のすべてのものが、さかまく波に
のみこまれ、すがたを失っていきました。
（少しの間）
つい先ほどまで、津波がくることを
知らずに、あそこにいたのだと、村人たちは
気づきました。
「おう、おそろしいことだ。」
時をおいて、津波は二度、三度と、
おそってきました。
―ぬ　く―

⑩

村人たちは、ずらりと、儀兵衛の前に
ひざまずいて、頭を下げました。
「おかげさまで、命が助かりました。」
「庄屋さま、ありがとうございます。」
儀兵衛は、うなずきながら、いいました。
「浜口の家には、
大地震のあとには、津波がくる
という、いい伝えがあってな。
とっさに、それを思い起こした。
ご先祖さまの、言葉のおかげだ。」
―ぬ　く―

⑪

儀兵衛は、若者たちを引きつれて、
となり村へいき、たくわえ米を
借りてきました。
そして、おかみさんたちが、米をたき、
にぎり飯をつくりました。
「さあ、これを食べて元気を出しなさい。」
儀兵衛が、先頭に立って、みんなに配って
歩きました。
―ぬ　く―

⑫

やがて、余震が続くなか、
あれはてた村に、いくつもの仮小屋が、
つくられました。
村人たちが、立ち直りの一歩を
ふみだしたのです。
ところが、津波によって、何もかも
失ってしまったある村人は、儀兵衛に、
「もう、広村には、住んでいられません。
働き口をさがしに、よその村へ
うつろうと思います。」
また、ある村人は、
「またいつか、津波がくるかもしれないと
思うと、こわくてなりません。
もっと、安全な所へいきます。」
と、なみだながらに、うったえました。
―ぬ　く―

⑬

儀兵衛は、浜辺によせる波を
見つめていました。
天洲ヶ浜と、美しく名づけられたこの浜辺。
「ここに、津波をふせぐ堤防をつくろう。
村人に働いてもらえば、それが
働き口になる。
ふるさとが、よみがえるのだ。」
儀兵衛は、ひとり、うなずきました。
浜口家では、むかしから、銚子で
しょうゆをつくり、江戸で大きな商売を
しています。
「働く人の給料や、堤防づくりのすべての
お金を出すと、大金が必要だが、
なんとしてでも、やりぬこう。」
と、かたく決心しました。
—ぬ　く—

⑭

さっそく、工事が始まりました。
儀兵衛が調べたところ、広村は、
ここ五百年の間に、ほぼ百年ごとに、
大津波におそわれていることが、
わかりました。
むかしの津波のようす、こんどの津波の
ようすをもとに、儀兵衛が堤防の設計をし、
工事のさしずをしました。
村人たちは、よく働きました。
村を守るために、がんばろう。」
「男も女も、働けば、すぐにお金が
もらえる。
ありがたい、ありがたい。」
「田畑の仕事が、いそがしくなれば、
工事のほうは、休みになるとか。」
「こんなに、働きがいのあることはない。」
—ぬ　く—

⑮

四年の月日、多くの人々の力、それに
大金をかけて、りっぱな堤防が完成しました。
（少しの間）
いなむらの火が燃えた時の、
安政南海地震津波から九十二年後、
昭和南海地震の時には、予想したように、
大きな津波がおそってきました。
しかし、堤防はゆるぐことなく、人々を
津波から守りました。
—ぬ　く—

⑯

和歌山県広川町の堤防では、毎年十二月に、
津波まつりがおこなわれます。
「いなむらの火をわすれません。」
「堤防づくり、ありがとうございます。」
こどもたちがそれぞれに、一ふくろずつの
土を堤防に運び、積み上げていのります。
そして、
「みんなで、ふるさとを守ります。」
と、防災の心をあらたにするのです。
（おわり）